

# ヴォルフガング・J・モムゼンと 「修正主義的」ナショナリズム研究(1)

今 野 元

## 0. 研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」

昨今のナショナリズム研究を概観するとき、我々はそのことに3つの問題を見ることができる。(1)ナショナリズム研究が反ナショナリズム「教壇預言」の様相を呈しているという問題。従来のナショナリズム研究は、多くの場合ナショナリズム克服のための啓蒙活動と表裏一体であった。とりわけ1980年代以降は、ネイションの「虚構」性を暴露するという論法が爆発的に流行し、日本では「過去の克服」の主体としてですら、ネイションの存在を一切許容しないかのような議論も珍しくない。だが凡そ学問において、白黒図式は分析を粗雑にし、討論を硬直させるのみで、結局は認識の深化に貢献しないのが常である。従来のようにナショナリズム研究と反ナショナリズム運動とが同一視されるならば、一旦「白」と思われたものは徹底して「白」く、「黒」と思われたものは徹底して「黒」く描くという傾向を助長し、ナショナリズムを巡る歴史の逆説を見逃すことにもなりかねない。(2)ナショナリズム「批判」が、分析対象によって不公平に展開されているという問題。ヨーロッパに関して言えば、第三帝国の記憶が残るドイツ・ナショナリズムが強く否定される傍ら、チェック・ナショナリズムやポーランド・ナショナリズムは「悲劇の民族」の愛国心として共感を込めて描写され、イギリスやフランスのナショナリズムが先進的形態として模範視されるが、ロシア・ナショナリズムは後進的形態として軽蔑されるという具合である。しかもそれら各国ナショナリズムのイメージはきわめて印象論的なものであって、実証研究との関係が明瞭でないことが多い。支配的な「ネイション」の「実体」視は果敢に攻撃するが、逆に少数派の「エスニック・マイノリティ」は率先して「実体」視するという情緒的な研究態度も、基本的には同根のものである。つまり、特定の時代や地域の政治状況を肯定したり否定したりする政治的道具に、現代のナショナリス

ム研究が陥っているということに他ならない。(3)ナショナリズム研究においても「英語帝国主義」<sup>1)</sup>が顕著であるという問題。ハンス・コーン、カール・ドイチュ、アーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、ライア・グリーンフェルド、エリック・ホブズボーム、アンソニー・スミスといったアングロ＝サクソン圏の、大胆な比較や推論を駆使した図式的ナショナリズム批判が通説として紹介されるのに対し、それ以外の語圏の研究はそもそも存在しないかのように扱われるか、マイネッケの「文化国民」、「国家国民」論のごく卑俗化した形態で流布されるのみである。特に膨大な蓄積のあるドイツ語圏のナショナリズム研究を看過することは、固より学問上許容できないが、ナショナリズム研究者のドイツ語能力が減退するなかで、事態は悪化する一方である。

研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、かかる研究動向に一石を投じるべく構想されたものである。本研究企画では、第1にドイツの主要なナショナリズム研究者を選出し、その学説の概要を紹介した上で、それにどのような学問的意義があるかを検討する。研究者の選出に当たっては、個別の実証研究の経験を踏まえ、更に思考を深めて理論的見通しを示した人物に注目する。第2に、その人物がナショナリズム研究を生み出すに到った人生上、あるいは研究上の経緯について叙述する。これはかつて叢書『ドイツの歴史家たち』<sup>2)</sup>が行ったことを、ナショナリズム研究に焦点を絞り、その執筆者世代(つまり「ドイツ社会史派」世代)も分析対象に入れて再び実施するものである。このような作業を経ることによって、この研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、先進的研究の「学習」という従来の「輸入学問」、「政治学」の試みとは一線を画し、一種のドイツ学問史ないし政治史の試みともなるのである。

## 1. ヴォルフガング・J・モムゼンの人格と業績

本論はこの研究企画の第3作として、デュッセルドルフ大学名誉教授ヴォルフガング・J・モムゼン(1930-2004年)を取り上げる。モムゼンは戦後ドイツを代表する歴史家の一人であり、「ドイツ特有の道」論を提唱する「ドイツ社会史」派の大家であって、マックス・ヴェーバー研究者として、またナショナリズム及び帝国主義の研究者として知られてきた。本論では、まずモムゼンという人物について概説し、次いで彼のナショナ

リズム研究を概観し、最後にその学問的意義を診断する。

W・モムゼンは1930年11月5日マールブルクで、ドイツ教養市民の名家として知られるモムゼン家に生まれ、同地で生育した。モムゼン家は元来北フリースラントのマルシュの発祥で、「モムゼン」という家名にも北欧風の響きがある。このモムゼン家を歴史上有名にしたのは、W・モムゼンの曾祖父テオドル・モムゼン(1817-1903年)であった。農民から牧師へと上昇したイエンス(1783-1851年)の長男に生まれたテオドルは、ローマ法制史研究者としてベルリン大学の教授職を獲得し、1902年にはドイツ人初のノーベル文学賞を受賞した。またプロテスタント「正統派」の父から離反したテオドルは、自由主義ナショナリストとしても活動した。若きモムゼンは、三月革命ではスイス亡命も経験し、その政治的情熱は専攻したローマ史研究にも如実に反映されていた。貴族階級に対して社会的劣位にある市民階級が、学問の権威を身に纏ってこれに対抗し、「教壇預言」を行って言論界に君臨するという「政治的学者」の典型例が、このテオドルに見られるのであり、それは彼の子孫たち、あるいは三男エルンストの妻クララの実兄マックス、アルフレート・ヴェーバーにも、結果的に受け継がれていくことになるのである。なおW・モムゼンは、テオドルの二男で、銀行家、政党政治家(自由思想連合、進歩人民党)であったカール(1861-1922年)の孫である<sup>3)</sup>。

W・モムゼンにとつとりわけ重要だったのは、マールブルク大学歴史学教授だった父ヴィルヘルム・モムゼン(1892-1966年)の存在である。ヴィルヘルムは出征のち、フリードリヒ・マイネッケの指導下で論文『リシュリュー・エルザス＝ロートリンゲン』<sup>4)</sup>を執筆して、1921年にベルリン大学で哲学博士号を取得した。1923年にゲッティンゲンで教授資格を取得したヴィルヘルムは、1928年にマールブルク大学員外教授、翌年に正教授となり、テオドル以来の歴史学という家業を再興した。またフリードリヒ・ナウマンの影響でドイツ民主党員として活動し、ヴァイマル共和国支持の立場を鮮明にしていた。しかしナショナリズムの情熱に燃えるヴィルヘルムは、ヴァイマル共和国の空中分解を目にして多元的社会に疑問を強め、1932年にヒンデンブルクの大統領再選を支持したのち、1933年には「ドイツ大学教授のアドルフ・ヒトラー及び国民社会主義国家への信仰告白」に署名し、1941年にはNSDAPに入党した。ヴィルヘルムは総統国家に、民衆と国家との融合、ドイツ民族の新しい団結の理想を見た

言われる。こうしてヴィルヘルムは、国民社会主義を積極的に唱道する論客となったが、帝国新ドイツ歴史研究所のヴァルター・フランク（1905-1945年）は、突然国民社会主義者を演じ始めたヴィルヘルムの「日和見主義者」（Konjunkturritter）ぶりには不信感を募らせていた。いずれにしても、第三帝国への自発的協力は戦後命取りとなり、ヴィルヘルムはマルブルク大学の教職を失うことになる。戦後のヴィルヘルムは、自分の国民社会主義的な歴史叙述が出版社の無断改竄によるものだったと主張し始め、また第三帝国期にフランクから受けた圧力を強調し、1934年にユダヤ人学生の博士号取得を支持したことを訴えたが、名誉回復には繋がらなかった<sup>5)</sup>。

注目すべきなのは、W・モムゼンが父ヴィルヘルムを必死に擁護していることである。W・モムゼンは「シーダー・コンツェ論争」を契機に企画された1999年2月25日のインタビューで、よく知られた父ヴィルヘルムのナチズム体制への加担については素通りして、父が1920年代に「民主的」（あるいはドイツ民主党员）であったという点のみを強調し、本質的に「茶色」だったわけでないとは弁明している。それどころかW・モムゼンは、父ヴィルヘルムの失職の経緯を、「非ナチ化」のためではなく、アメリカ占領軍から「民主的」人物として政治的役割を期待され、周囲の敵から追い落とされたのだと、まさしく正反対の説明をしているのである<sup>6)</sup>。ちなみにW・モムゼンの双子の兄弟である歴史家ハンス・モムゼン（1930年-）も、これと全く同じ事実認識をしており、大学改革に熱心なヴィルヘルムがアメリカ軍に州文部大臣として登用されそうになって周囲から潰されたと言明している。ハンスは第三帝国における父ヴィルヘルムの窮状を強調し、父の国民社会主義への加担を批判的に考察しようとはしない<sup>7)</sup>。

W・モムゼンは父ヴィルヘルムを断固擁護するが、彼自身の1945年までの歩みも謎に包まれている。同世代のヨーゼフ・ラッツィンガー、ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー（1931年-）、ユルゲン・ハーバーマス（1929年-）が、今日ヒトラー体制との関係で取り沙汰されているように、W・モムゼンにもヒトラー・ユーゲントへの（自発的あるいは強制的）加入、国防への協力、愛国的信条告白などがあってもおかしくないのだが、W・モムゼンは遂に自己批判的な回顧を行わず、また他者が彼を告発するというようなことも（これまでは）なかった。

W・モムゼンが触れないことだが、父ヴィルヘルムの大学追放は、彼の

学問的死亡を意味するものでは全然なかった。W・モムゼンは、ヴィルヘルムが再就職できないまま、一家は困窮のどん底に落とされたとして、自分たちが蒙った被害ばかりを強調する。だが実際には、それでも父ヴィルヘルムの学問的生産力は衰えず、出版業者からも見放されはしなかった。失職直後のヴィルヘルムは、有名な『ゲーテの政治的見解』(1948年)<sup>8)</sup>を発表しており、『フランス革命から現代に到る西洋の歴史』(1951年)<sup>9)</sup>など数々の概説書も、日本の研究者にも重宝された『ドイツ政党綱領集』(1952年、但しこの企画は1931年以来のものであった)<sup>10)</sup>も、みな戦後の失業中に発表されたものだった。故郷プレッテンベルクに蟄居後のカール・シュミットもそうだったが、失業しながらもヴィルヘルムは執筆活動を続け、有名学術出版社から刊行することができたのだった。

当のW・モムゼンは父の苦境に強い印象を受けたようで、一時は歴史家には絶対ならないと決意したというが、それでも散々迷走した上で、結局は歴史学へと近付いていった。当初マールブルク大学に入学したモムゼンは、物理学と数学を勉強した。しかしこれを中断すると、モムゼンは工場で半年間労働者として働いた。モムゼンは懐古談のなかで、当時は技術者になるつもりだったと述べている。けれどもこれも中断したモムゼンは、文系に転向して哲学から社会科学まで、様々な領域を彷徨した。そうしたなか、どうして歴史学に落ち着いたのかについては、モムゼンは自分でもよく分からないと口を濁している。当時(のち『ナティオーネス』全集の編集者となる)中世史家ヘルムート・ボイマン(1912-1995年)の信奉者だったモムゼンは、その競合相手であったカール・レーヴェの講義を聴こうとケルン大学へ赴いたが、レーヴェがテュービンゲン大学に移ったので、ひとまずハンス・カウフマンの美術史を多く聴いた。しかし自分の形態記憶能力が傑出したものではないと自覚したモムゼンは、美術史を専攻しても「凡庸なままで留まる」ことになると恐れて、断念したのだという。結局モムゼンは、テオドル・シーダー(1908-1984年)に師事したのだった。モムゼンはシーダーに、「知的に本当に魅力的」なものを感じ、その副手(studentische Hilfskraft)に採用された。モムゼンがシーダーのもとに落ち着いたのは、学問的魅力的のためばかりではなく、財政的事情によるものでもあった。父親が失業して困窮していたモムゼンは、月額90マルクの副手への謝金に瞠目し、当初予定していたフライブルク大学への移籍を取り止めたという<sup>11)</sup>。このように将来に悩んで迷走し、風来坊のように現れた

モムゼンが、いきなり高名な歴史家シーダーの副手に採用されたというのは、一体どうしてだったのだろうか。公式には「優秀に付き」と説明されるのだろうが、シーダーとの個人的相性、名門モムゼン家の権威、追放された先輩歴史家ヴィルヘルムへの配慮といった非学問的要因が、シーダーの脳裡に去来したのではないかという推測は禁じ得ないものがある。

「歴史家ツンフト」批判を掲げる「ドイツ社会史派」のW・モムゼンだが、修業時代の彼は「歴史家ツンフト」と蜜月関係にあった。ヴェーラーの場合もそうだが、モムゼンはイギリス留学(リーズ大学)を挟んで副手、助手(Assistent)として12年間「仕えた」(“gedient”)シーダーに、晩年に到るまで強い一体感を感じている。当時のモムゼンは、シーダーの研究・教育を手伝い、演習で用いる史料を選別する際も、個々の史料の要約や評価を記したメモを渡すなど、シーダーの黒子を務めていた。その際モムゼンがうっかり間違えたことを書いても、「忠実な」(loyal)シーダーは強く咎めることはなかった。他にもモムゼンら助手は、シーダーの私邸に膨大な書籍を運ぶなど、師匠の御側御用に奔走した。それでもモムゼン本人には、自分が側用人として師匠の仕事を大幅に手伝ったという自覚はないらしい。だが外部の人間から見れば、シーダーとモムゼン、ヴェーラーら一部の寵愛された弟子たちとの密着した関係は、まさしくクライエンテリズムと呼ぶべきものであって、後年の「歴史家ツンフト」批判にはそぐわないものだったと言えるだろう。とはいえモムゼンも、シーダーと自分との間に何の齟齬もなかったと言うわけではない。とりわけシーダーは、当時のモムゼンが陥りがちだった「拙速なイデオロギー化」(vorschnelle Ideologisierung)には批判的だったという。ヴェーバーと第三帝国との連続性を強調する『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』の後半部は、この著作でも最も論議を呼んだ部分だが、シーダーはこれに「非常に批判的」で、モムゼンと集中的に討論した上で、カリスマの支配と「デモクラシー的支配の合理的・議会主義的理論」とを架橋しようとしたルドルフ・スメントの議会支配理論を活用するように勧めたが、モムゼンは校正段階でこの部分を削除し、シーダーもこれを受け入れたという。しかしこれも、モムゼンにとってはシーダーとの熱い蜜月関係のなかの1つの逸話に過ぎない。モムゼンのヴェーバー論が批判を浴びた際には、シーダーはモムゼンに「絶対的に忠実」だったといわれ、モムゼンも「拙速なイデオロギー化」をシーダーから窘められて助かったこともあったという<sup>12)</sup>。

1998年ころから「シーダー・コンツェ論争」で師シーダーの「過去」が告発されるようになると、W・モムゼンは決然と彼を擁護した。モムゼンは、シーダーの1930年代の著作には「全く何の政治的メッセージも含まれていないか、非常に間接的なものだけ」だとし、近年の批判的指摘は「それほど新しくない」と切り捨てた。モムゼンは、シーダーが多様な意見にどれほど寛容であったかを力説し、彼を国民社会主義に結び付けようとする議論は「あべこべ」だとする。更にモムゼンは、シーダーのエリート主義的な「青年保守主義」と「大衆文化」的な国民社会主義とを異質なものとしたのである。「保守派とナチズムとは区別されるべき」という論理は、のちにヴィンクラーがその師ロートフェルスを擁護する際にも採用されることになるが、モムゼンはシーダーが尊敬していたロートフェルスも、(一定の留保は置きつつも)擁護する。この文脈でモムゼンは、ロートフェルスらが進めたケーニヒスベルク大学の東方学も擁護し、ビスマルクはドイツ国民理念ではなく、プロイセン国家理念の信奉者だったというロートフェルスの有名な学説にも理解を示したほか、中世末期におけるドイツ人の「文化的指導国民」としての役割をも認めるに到っている<sup>13)</sup>。こうしたモムゼンの見解は、確かに歴史的観点では顧慮すべき点があるだろうが、従来「過去」を糾弾してきた左派言論人の発言としては、やや意外なものがある。

こうして見ていくと、W・モムゼンら「ドイツ社会史派」世代の矛盾した性格が明瞭になってくる。モムゼンは1999年段階でもなお自分たち世代の原則をこう要約する。「我々はいまやこの旧弊を排除し、西欧的伝統と調和した、デモクラシー的秩序に合うような歴史像を発展させなければならぬ。」こうした観点から、彼らは「歴史家ツunft」の因循姑息を告発し、近代ドイツを権威的で偏狭なものとして糾弾することで、連邦共和国のオピニオン・リーダーとしての地位を築いてきたのである。ところが彼らが歴史家として1960年代前後に日の目を見られたのは、実は「歴史家ツunft」世代の寛容と愛顧のお陰であった。まさしく当時のドイツ歴史学界のクライエンテリズムこそが、彼らの上昇を(モムゼンの場合も)助けていたのである。従って彼らが始めた「過去」糾弾の矛先が、後続世代によってシーダーら彼らの恩師たち(あるいは彼ら自身)に向けられると、彼らは俄かに学問的厳密さを要求し、かつてのフィッシャー批判者のように、後続世代の研究上の新しさを否定したり、「保守派とナ

チズム」との違いを強調したりして、「過去」糾弾の政治姿勢を一変させたのである。こうした言動の変化にも拘らず、モムゼンが「シーダー・コンツェ論争」後もなおこう述べて、自分たちを英雄視しようとするのは、全く信じ難いことである。「若いものは、何にも囚われずに古い世代をとっちめようとするものだ。[……] 我々も当時は勿論、我々の父親世代をとっちめようとしたものだった。」<sup>14)</sup>

W・モムゼンは学生紛争が渦巻き、ブランド社会民主党が擡頭する1960年代末・70年代初頭に「職業としての学問」の世界に入った。モムゼンは1967・68年にケルン大学で私講師となっている。そしてその直後、1968年のうちにモムゼンはデュッセルドルフ大学の近代史正教授として招聘された。ヴェーラーのピーレフェルト大学と同じく、デュッセルドルフ大学は戦後新設された多くの大学の1つで、1965年に臨床医学アカデミーから昇格したものである<sup>15)</sup>。それはマールブルク大学やケルン大学のように古い伝統を有する大学ではないが、しがらみの少ない環境での研究を望む若手には良い勤務先であったかもしれない。結局モムゼンは最後まで、このデュッセルドルフ大学から異動することがなかった<sup>16)</sup>。

デュッセルドルフ大学教授としてのW・モムゼンは、国際的に知られる歴史学者となっていった。イギリス留学をしたW・モムゼンは、ヴィンクラーやヴェーラーとは異なり、アメリカではなくイギリスに傾斜しており、このためか1977年から1985年まで、ロンドンのドイツ史研究所で所長を務めた。またモムゼンは国際歴史学委員会の分科会委員長を務め、1988年から1992年まではドイツ歴史家連盟議長を務めた<sup>17)</sup>。

さて筆者は1999年から2003年まで、博士論文「マックス・ヴェーバーとポーランド問題」に関してW・モムゼンに助言を求め、その人柄に接する機会を得た。当時の記録を辿ってその経緯を再現しておこう。

筆者とW・モムゼンとの最初の出会いは1999年2月であった。1998年10月にベルリン留学を開始して、5箇月目に入った1999年2月4日、筆者はポツダムでW・モムゼンの講演を聞いた。当時モムゼンはすでにデュッセルドルフ大学を退官しており、ベルリン＝グルーネヴァルトの国家学・国家実務研究所で研究生生活を送っていたのである。モムゼンはこの日、開始時間を誤解して1時間も遅刻してきた。講演内容については記録がないが、当時の筆者はモムゼンの第一印象を、日記に「話す達磨という感じ」と記している。その後の懇親会で自己紹介した筆者は、その場で



自分がヴェーバー研究をしていることを告げ、後日の面談を申し出た。事前に研究計画を郵送し、電話で面談日を決めた上で、1999年3月29日12時に筆者が研究所に行ってみると、「モムゼン教授は本日オランダ出張で不在」だと事務職員は言う。不審に思いながら玄関でしばらく待っていると、案の定20分ほどしてラフな服装のモムゼンが現れた。モムゼンは約束時間をよく記憶していなかったことを詫びつつ、そのときまだ封すら切っていなかった筆者の研究計画にその場で目を通し、しばし筆者と討論した。モムゼンはそのとき、「マックス・ヴェーバーとポーランド問題」というテーマ設定で博士論文になるほどの新発見ができるか疑問だとし、また筆者が目を付けていたミュンヘンのヴェーバー関係文書は閲覧してもこのテーマに関しては実りが少ないだろうと述べた（実際にはそれは筆者の研究に重要な役割を果たしたのだが、このときモムゼンがどういう意図から実りが少ないと述べたのか、いまだに合点がいかない）。またモムゼンは、ヴェーバーのポーランド問題に対する評価がロシア第一革命で根本的に変化したという「ダマスカス弁護論」に固執し、それではヴェーバーのポーランド人所有地収用賛成論や戦後のポーランド人労働者排除論が説明できないとする筆者とは意見が合わなかった。

1箇月後の1999年4月26日20時から2時間余り、ウンター・デン・リンデンのベルリン大学大講堂でニアル・ファーガソン『誤った戦争』の書評会が行われ、ファーガソンの講演のあとでモムゼンがヴィンクラーと共に壇上で書評を行った。ファーガソンのテーゼは、1914年8月にイギリスが参戦を自制すれば、ロシア革命もドイツ革命も起らず、ソヴィエト連邦も第三帝国も生まれず、ドイツはヨーロッパ大陸の覇権を握りつつ、徐々に議会制デモクラシーへの道を歩んだだろうというものである<sup>18)</sup>。第一評者のモムゼンは、感情を剥き出しにしてファーガソンの楽観論を批判し、権威的国民国家ドイツの侵略意欲を甘く見すぎていると激昂した。挙句の果てにモムゼンは、第一次世界戦争で戦死した親類のことに言及し、感極まって壇上で泣き出した。これで書評会は、登壇者も聴衆もすっかり凍り付いてしまった。書評会のあと、筆者は数日前に図書館で見つけていたヴィルヘルム・モムゼンの『リシュリュウ・エルザス＝ロートリンゲン』について、W・モムゼンに意地悪く尋ねたところ、モムゼンは「それは当時としては比較的中立的に書かれた研究だったのだ」と弁解していた。

その後筆者は、いつだったかプロイセン枢密国家文書館でW・モムゼン

と遭遇したことがあった。この文書館にはヴェーバー関係文書があり、筆者はそれを目当てに通っていたが、博士論文以来モムゼンもそれを使用していた。筆者はモムゼンの隣席で閲覧をしていたが、しきりに繰り出されるモムゼンの聲咳の迫力には驚かされた。また我々が閲覧室で話していたときに、2人とも「声が大きい」と文書館職員から制止されてしまった苦い記憶もある。

W・モムゼンを筆者が最後に目にしたのは、2000年9月29日、アーヘン歴史家大会でのことである。15時から行われた全体シンポジウムでは、前回大会に引き続きシーダー・コンツェ論争が扱われた。開会前にモムゼンを見つけた筆者は、挨拶して無沙汰を詫びたが、この日のモムゼンは心ここにあらずの様相で、会話は弾まなかった。

筆者は2002年2月6日にベルリン大学で博士号取得の口答試験を終え、博士論文のドイツ語印刷稿は2003年前半に固めたが、そこで早速W・モムゼンに送って感想を聞いた。この原稿には、大学に提出した原稿よりはかなり温和ではあるが、モムゼンとの対立点における筆者の立場が明記されていた。モムゼンの感想はなかなか来なかった。催促の電子メールを出すと、「確かに受け取った」、「いま机の上にある」という返事が来て、後日の返答を示唆していたが、それは遂に来なかった。翌2004年秋、モムゼンがバルト海で海水浴中に溺死したという情報が、日本にも伝わってきた。筆者が博士論文をドイツで刊行したのは2004年11月で、モムゼンに完成品を献呈し、反応を聞くことはできずに終わった。筆者は東京で、聊か自己中心の観もあったが、迫力満点の歴史家、言論人で、筆者に対しては概ね友好的だった故人のことを偲んだ。

## 2. ヴォルフガング・J・モムゼンのナショナリズム研究

W・モムゼンのナショナリズム研究には2つの潮流が混在している。第1の潮流は博士論文『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』から始まる一連のドイツ・ナショナリズム研究である。これは「ポスト・ナショナル」な秩序観に立脚したドイツ「再統一」反対論へと繋がり、同時にドイツ帝国研究としても深化していった。第2の潮流は『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』、あるいは教授資格論文『エジプトとヨーロッパ帝国主義』を嚆矢とする一連の帝国主義研究で、これはナショナリズム研究そのもの

ではないが、それと密接な関係を有するものである。以下では、この2つの潮流を見ていくこととしたい。

### (1) マックス・ヴェーバー研究

W・モムゼンの博士論文であり、彼の学者人生を決定付けたといっても過言ではない出世作が、『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』（第1版1959年・第2版1974年・第3版2004年）である<sup>19)</sup>。ヴェーバーの政治的生涯を通じてドイツ近代の病理性を強調したこの作品は、フィッシャー論争を嚆矢とするドイツ特有の道論を先取りした力作である。モムゼンのヴェーバー研究の基本方針は、西欧統合、東独・ポーランドとの和解・共存、共和制、議会制デモクラシー、弱い国家元首といった（とりわけブランド登場以後の）ドイツ連邦共和国の基本原則を肯定するモムゼンが、その観点からヴェーバーというドイツ近代の偉大な政治評論家を是々非々で評価するというものであった。社会学、経済学、政治学など各界に熱狂的な礼讃者の多いヴェーバー研究の世界では、モムゼンを不遜なヴェーバー批判者として一方的に告発することが多いが、モムゼンの執筆意図はヴェーバーの批判そのものにあっただけではない。ここでは、この論文がナショナリズム研究としてどのような特徴があるかを考えたい。

第1に、W・モムゼンはヴェーバーに、ドイツ帝国の自己中心的で過剰なドイツ・ナショナリズムの一例を見て、これを批判した。モムゼンはヴェーバーの1890年代におけるポーランド農業労働者の排除運動、その帰結としての全ドイツ聯盟への加入、第一次世界戦争におけるヴェーバーの戦後処理構想を批判的に紹介し、同じく戦争中における協商側兵士への否定的・侮蔑的な物言いを問題視した。こうしたヴェーバーの激情的なナショナリズムは、モムゼンの研究を待つまでもなく、それまでに刊行されていたヴェーバーの著作物からも十分に読み取れるものであったが、モムゼンが文書館作業を踏まえて更に詳細に解明したので、そうした事実に触れたがらないヴェーバー「専門家」たちの間で、大変なアレルギー反応を引き起こしたのである。

第2に、W・モムゼンはヴェーバーに、「権威主義的国民国家」ドイツ帝国への警告者を見出し、彼が同時代の自己中心的で過剰なドイツ・ナショナリズムに歯止めをかけようとした点を評価した。これは第1の側面と矛盾するようだが、実際相対立する評価がモムゼンのヴェーバー論には

混在しているのである。モムゼンは第一次世界戦争におけるヴェーバーがマイネッケやゾンバルトら周囲の大学人とは異なり、反西欧的な「1914年の理念」に批判的で、そうした反西欧煽動の背景に官僚制支配の利害があることを暴露した孤高の観察者であったと評価する<sup>20)</sup>(そこでは、実はヴェーバーの議論にも「1914年の理念」に共鳴する部分が多々あることは見逃されている<sup>21)</sup>)。またモムゼンは、ポーランド人に対するヴェーバーの対決姿勢が1906年のロシヤ政治研究を転機に改められたと好意的に評価する(そこでは、ヴェーバーが同じ1908年にポーランド人の土地収用を唱えていた事実が正視されていない)<sup>22)</sup>。

## (2) ドイツ「再統一」反対の歴史学的論証

W・モムゼンは1970年代から80年代にかけて、ナショナリズム論を盛んに展開している。この領域でのモムゼンの議論は、ドイツ統一直前の1990年2月に刊行された『国民と歴史——ドイツ人とドイツ問題について』にまとめられた。この論文集には、1970・80年代のモムゼンが様々な機会に披瀝したドイツ・ナショナリズム論がまとめられており、内容的に重複が多いので、以下でその論理構造を整理することにする。

端的に言えば、W・モムゼンの1990年までのナショナリズム研究は、歴史学的知識を総動員して、西ドイツ国家の現状をドイツ政治史の正しい帰結として肯定し、それが永続的であるべきことを人々に納得させようとする「ポスト・ナショナル」な政治評論であった。

W・モムゼンは、「国民」(Nation)理解におけるドイツのフランスとの違いを強調し、ドイツの「国民」概念が「主観的」(subjektiv)領域より「客観的」(objektiv)領域に根差したものであることを強調する。モムゼンは「フランスの状況とは異なり」ドイツには持続的な統一国家がなかったために、「国民」(Nation)が「国家以前の」のものになったと説く。モムゼンのいう「客観的」とは、言語や出自に依拠しているという意味である。モムゼンは、「客観的」なドイツ国民にも「ヴァッサーポラッケン」のような「主観的」統合の余地はあり、また「主観的」統合といっても実は「客観的」基盤が前提となっている場合が多いなど、一定の留保を置く。だがこうした留保にも拘らず、結論的にはモムゼンはかなり明快に独仏国民を区別するのである。「フランスでもイギリスでも「国民的アイデンティティ」は論議の対象にならない。というのもそれらの国々には遜色のない、多く

の観点で連続した歴史的伝統があるからであり、歴史的発展がドイツの場合のような劇的な断絶を蒙っていないからである。」モムゼンは、「西欧」(この言葉ではフランスのみならずイギリスも一括りにされている)がドイツに代表される非西欧諸国とは違って順調に国家統一を成し遂げ、「解放的」で「民主的」な「国民」概念を作り上げたという図式(いわば「コーンの二元論」)を、いつも肯定する方向で議論を進めている。「疑われ得ない独自性と自立性」を、「フランスの伝統がかくも印象深く体现している」と言明されるのに対し、ドイツの説明ではトライチュケやシュモラーの蛮勇ぶりばかりが強調され、ヘルムート・プレスナー(1892-1985年)の「遅れてきた国民」論が援用されるという具合である<sup>23)</sup>。

W・モムゼンは、ビスマルクのドイツ帝国を無意識のうちにドイツ国民国家の基本形とし、ドイツ連邦共和国をドイツ国民の一部とする(つまり将来の東西ドイツ統一を前提とする)秩序意識が、なお基本法に残存していることに疑問を投げかける。モムゼンは「いわゆる再統一政策」という表現で、東西ドイツ統一を目指す政策への警戒感を隠さない。モムゼンがビスマルク帝国をドイツ統一の基準とすることに違和感を示すのは、それが「きわめて官憲国家的な創造物、「上からの革命」の産物」だったからであり、1870年段階では「テオドル・シーダーが正当にも強調したように、まだ国民国家ではなかった」のが、あとから実体を具備していったに過ぎないからであり、その外交の「反ヨーロッパ的」性格ゆえに「我々にとって問題」だからなのだという。とりわけモムゼンは、東西ドイツの統一国家形成がヨーロッパ統合政策とは両立困難だという信念を堅持している。こうしてモムゼンは、ビスマルク帝国から今日に至るドイツ国民国家の連続性という議論を、「説得力を失った」ものと明快に、そして何度も繰り返して否定するのである(もっとも西ベルリンが自由都市であり続けることは、ドイツ再統一への布石としてではなく、西欧的デモクラシーの国家社会主義的秩序への突入口として引き続き重要なのだという)<sup>24)</sup>。

W・モムゼンは、当初ドイツの部分国家として自己認識していたドイツ連邦共和国が、徐々に統一されたヨーロッパという新しいアイデンティティに与するに到ったことを説く。ヨーロッパ理念が強調されることで、ドイツ人は「自分たちの政治的伝統の問題のある要素」から逃れることができた。経済復興を実現して一般大衆の生活が向上し、また社会主義圏の成立で議会制デモクラシーが対抗しうる唯一の現実的対案となり、50年

代や60年代初めに先進国一般に「脱政治化」の波が来たことで、当初は正統性が疑問視されていたドイツ連邦共和国も次第に安定していった。国民理念を断念してヨーロッパ理念に移ることを唱えた先駆者は、カール・ヤスパース(1883-1969年)であった。ラルフ・ダーレンドルフ(1929-2009年)は、統一ヨーロッパの理念を「失われた国民の統一性の代替」と呼んでいるという<sup>25)</sup>。

過去のドイツ国民意識から逃れるために、W・モムゼンは「文化国民」(Kulturnation)というアイデンティティの「意識的な再活性化」を訴えている。エルンスト・ノルテ(1923年-)が指摘した通り、東方政策の結果としてドイツ連邦共和国は複数のドイツ国家の1つであるという認識が広まった。ドイツ「文化国民」全体の代表を自認するドイツ連邦共和国は、自己抑制し周辺国に配慮する必要がある。ドイツ連邦共和国が進歩的なヨーロッパ政策の牽引車であることは、理想主義のためだけではなく、その国民的利益がヨーロッパの利益と一致するからでもあるという<sup>26)</sup>。

ドイツ国民を複数の国家からなる「文化国民」として理解することを、W・モムゼンは将来への切り札として強く唱導していた。モムゼンは統一国家こそ1871年から1945年までという1期間の「1つのエピソード」に過ぎなかったのだとし、現状を「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」などの過去に繋がるものだと考えた。他方でモムゼンは、マリオ・ライナー・レプシウス(1928年-)のように、ドイツ人が諸国家に分かれれば一体感も失われていくという議論には与しない。モムゼンは文化が今日どれだけ国際化しようとも、各国の教育システムや政治文化に根差した国民文化は存続するという。諸国家に分かれたままドイツ「文化国民」の一体感は存続し、困難を抱えた東ドイツに対して西ドイツが文化的に優位に立ち、その指導者を自認するというのがモムゼンの秩序認識なのである<sup>27)</sup>。

W・モムゼンは、ビスマルク帝国時代の「国民」概念から、1945年以降のドイツ人が、困難な道りを経て徐々に解放されていったとし、その過程を説明しようとしている。モムゼンの現代史認識を辿ってみよう。

W・モムゼンはドイツ帝国に、明確にヒトラー体制の根源を見ている。モムゼンはドイツ帝国が自由を求める市民階級の運動の帰結であることを認めつつも、そうした側面を「上からの保守革命」という側面の圧倒的強調によって希薄化させている。モムゼンは、ドイツ帝国が十分に西欧的デモクラシーを採用していなかったから、第一次世界戦争という「過ち」

(Fehler) を犯したのだというフィッシャーのテーゼを固守する。ヨーロッパ理念がドイツ・ナショナリズムとゼロ・サム関係にあると見るモムゼンは、ヨーロッパの秩序を考えず自国の利益だけを追求する思考が、ドイツ帝国から第三帝国へと受け継がれたと考えている。ヴィンクラーにおけるように、一面で（例えば帝国議会選挙法などについて）ドイツ帝国が評価されるようなことはなく、それは常に「西欧」の劣位の対抗者として描かれている<sup>28)</sup>。

W・モムゼンは「1914年の理念」に、「ドイツ特有の道」の病理性を見ている。これはドイツ「指導エリート」が「ドイツ特有」の使命感から唱えた理論で、西欧的デモクラシーの「物質主義的功利主義」とも、ロシア帝国の専制からも異なる「ドイツ特有の道」を謳歌するものである。近年では「ドイツ特有の道論」に対する批判が相次ぎ、イギリス社会史派のジェフ・イリー（1949年-）やデイヴィッド・ブラックバーン（1949年-）がイギリス政治の理想化に警告したほか、トーマス・ニッパード（1927-1992年）も各国毎の「特有の道」の存在を指摘している。だがモムゼンは飽くまで、西欧的デモクラシーを敵視する「1914年の理念」が有したドイツの政治文化への影響は見逃せないと自説を曲げないのである。その際モムゼンは大学人の果たした役割を強調し、「文化世界への声明」、ゾンバルト『商人と英雄』などを例として挙げている<sup>29)</sup>。

W・モムゼンにとってヴァイマル共和国は、「権威主義的」(autoritär)である点でドイツ帝国や国民社会主義体制と連続した体制である。ヴェーバー論でも披露されたように、モムゼンは直接公選大統領制と国民社会主義体制とを、議会制デモクラシーへの「権威主義的」対抗という意味で連続したものと見る。1932年段階でヒンデンブルク周辺がヒトラー組閣阻止に動いていたという事実は、モムゼンの興味を惹くことがない。興味を惹くのは、「ポツダムの日」において保守派と国民社会主義との反西欧的和解が為されたことのみである。また全ての政治党派に活動を許し、結果的にヒトラーらの擡頭をも許したヴァイマル共和国の「形式的民主主義」(Formaldemokratie)は、「価値合理主義的」(wertrational)な連邦共和国を肯定するモムゼンには、国制上の構造的欠陥として認識されている。またモムゼンは、「ヴィルヘルム期の権力政治的夢想」が、ヴァイマル共和国において維持されただけでなく、寧ろ増大したとしている<sup>30)</sup>。

W・モムゼンは、1945年に全てが一変したとは見ていない。ドイツ人は

「己の罪ゆえに」それまで慣れてきたヨーロッパの覇権的地位を失い、「賤民民族」(Pariavolk)に身を落とした。連合国はポツダム会談で、1937年国境でのドイツ国民国家再興で同意していたが、冷戦のためドイツは2つの国家に分割されていた。連合国は「非ナチ化」を行い、とりわけアメリカ合衆国は西側の盟主としてドイツの政治文化改善を重視したが、まずドイツ人の間に広まったのは歴史から目を背け、黙りこくる風潮であった。それはまさに、有名な心理分析者アレクサンダー・ミッチャーリヒ(1908-1982年)が「悲しむことの不能さ」を指摘した時代である。またキリスト教的・普遍的伝統が強調され、ブルクハルトやトクヴィル、トインビーやA・ヴェーバーが流行したのも、この時機の特徴である。ゲルハルト・リッター(1888-1967年)やハンス・ロートフェルス(1891-1978年)は、第三帝国とは異なる「もう1つ」の、保守的なドイツ」を称揚しようと試みた。これに対し、転換の徴候はフリードリヒ・マイネッケ(1862-1954年)、エルンスト・ハインペル<sup>31)</sup>、ルートヴィヒ・デヒーオ(1888-1963年)、フランツ・シュナーベル(1887-1966年)に現れた。更に新しい世代は、新しいデモクラシーに道徳的基盤を提供しようと情熱を燃やし、カール・ディートリヒ・ブラッハー(1928-2005年)やクルト・ゾントハイマー(1922年-)の「政治学」研究を生み、後者は特にドイツに残る「権威主義的」思考に警告を発した。「現実主義者」アデナウアーの西欧統合政策は、ドイツ国民国家を求める余地をなくし、ドイツ人の政治意識の安定化に大きく貢献した。西ドイツ人は「遅れてきた」ものの、「歴史から十分に学んだ」結果、全ヨーロッパ的・国際的システムを押しつけてまで国民国家を希求することを止めたのである。だがそれでもSPDのクルト・シューマッハー(1895-1952年)やFDPのトーマス・デーラー(1897-1967年)、またCDU/CSUの多くの政治家に見られるように、古い国民国家理解はなおも生き続け、教育政策上も国民的統一への関心を維持しようと努めたため、「国民至上主義的伝統」(nationalistische Tradition)が死滅したのはようやく1950年代末のことだった。そして国民国家の問題から解放されることで、西ドイツ社会は自由でデモクラシー的な伝統に完全に開かれたというのである<sup>32)</sup>。

西ドイツの議会制デモクラシーが、ヴァイマール共和国の先例とは異なり政治的に安定していった背景には、2つの外的理由もある。第1に、冷戦によって「資本主義的基盤に根差した多元的なデモクラシー」の西側と、



「マルクス＝レーニン主義の国家独占的秩序」の東側とが対峙したことで、西ドイツ人には実質的に体制選択の余地がなくなったことである。第2に、マーシャル計画のお陰で西ドイツが経済復興を成し遂げ、「社会的市場経済」の政策も成功し、階級闘争を減退させたことである。更には、東方から流入した難民が西ドイツに新たな活力を提供し、二大政党であるSPDもCDU/CSUも中庸を目指して、左右の急進勢力の付け入る隙がなくなったことも指摘されうる。西側先進国一般に広まった「イデオロギーの終焉」が、ドイツにも見られたというのである<sup>33)</sup>。

W・モムゼンは自分たちの世代の革新性を強調し、後続世代の学生運動には皮肉の籠った態度を示している。モムゼンは1961年の景気後退を契機に、CDU/CSU支配に揺らぎが生じ、1960年代初頭から心理的な変化が生じたと見る。その表れがフィッシャー論争であるとされるが、恐らくモムゼンは自分のヴェーバー研究もそのなかに位置付けたいことだろう。学生運動には2世代あり、最初の「反権威主義的」世代（ここにはモムゼン世代が観念されていると思われる）は社会の道徳的再構築を目指したが、第2世代はロマン主義的なネオ・マルクス主義に陥り、理論的基盤も曖昧なまま失敗したとする。「アメリカ帝国主義」という彼らの闘争用語も、東側の脅威に対抗するためアメリカ軍の存在を重視するモムゼンには妄言にしか聞こえない。このように自分たちの世代を道徳的に肯定し、後続世代の運動を失敗と切り捨てるモムゼンだが、それでも学生運動は一般に社会に大きな変化をもたらしたと、全体的には好意的に総括している<sup>34)</sup>。

石油ショック以降の景気低迷と「保守主義」の復活について、W・モムゼンは強い憂慮を表明している。モムゼンは西ドイツの輿論が戦後の成功に慢心して、西欧諸国を見下すようになってきたのを危惧していた。マスコミがイギリスの経済不振を「イギリス病」(Die englische Krankheit)と揶揄して読者が喝采し、「我々は再び一角のものになった」(Wir sind wieder wer)と自己満足する「新ドイツの政治的・社会的意識」を、モムゼンは厳しく批判する。モムゼンによれば、イギリスはドイツより大きな経済的危機を抱えつつも、危機を克服する能力も相変わらずより大きいと断言し、寧ろドイツ人側の対応能力を積極的に疑問視するのである(ただそれが具体的にどう言う意味なのかは明らかではない)<sup>35)</sup>。ちなみにモムゼンがドイツ輿論のイギリス批判に苛立つ背景には、彼が議会制デモクラシーの「道徳的基礎付け」のために、アメリカではなく、イギリスの「模

範」を重視しているという点がある。なおモムゼンが警戒する保守化は、非常に幅広いものである。我々の曾祖父や祖父は確かにとても権威主義的だったが、そんなに悪い人ではなかったという「曾祖父や祖父への公正」論(ニッパードアイ)は、モムゼンには批判精神の欠如に思われたのだった<sup>36)</sup>。

東方政策の支持者であるにも拘らず、ドイツ民主共和国へのW・モムゼンの態度は冷淡である。モムゼンは議会制デモクラシーを唯一の理想とし、それ以外のデモクラシーの試みを受け付けない。モムゼンにとって東ドイツ国家は、ソヴィエト連邦に支配された不自由な占領地域、いわばSBZ以上のものではない。モムゼンはデモンタージュなどには言及するが、それ以上に東ドイツ政治に立ち入ろうとはしない。東ドイツが西ドイツとは別な手法で、ある意味より急進的にドイツの「権威主義的」伝統に立ち向かったこと、東ドイツに独自の価値を見出そうとしたドイツ人もいたことは、西ドイツに自己同一化したモムゼンの興味を惹くことではない。モムゼンは国民社会主義体制もドイツ民主共和国も、「全体主義的体制」(die totalitären Systeme)として一括している(にも拘らず、彼が1940・50年代の「全体主義」(Totalitarismus)概念に距離を置くかのような言い方をしているのは、理解し難いことである)。モムゼンはまた、東ドイツ政府が打ち出す「社会主義的国民」という自己認識も見込みなしとしている。ここまで東ドイツに否定的でありながら、冷戦期のモムゼンはソヴィエト連邦の東中欧支配の崩壊は望ましくないとしていた。近未来にそうなる可能性はなくはないが、それは平和を危殆に晒す虞があり、それに続くドイツ再統一は、全ヨーロッパ的観点から望ましくないのである<sup>37)</sup>。

もはや存在するのは連邦共和国ドイツ人の国民意識だけであり、全ドイツ的な国民意識は存在しないのか?——この問いに1983年のW・モムゼンは、それは意識下には押しやられているものの、再燃する可能性はあるとした。モムゼンによれば、国民意識とは言語、エスニックな独自性、文化的遺産、宗教など異なる要素が作用して、歴史的過程の結果生まれるものであって、政府が操作できるようなものではないというのである<sup>38)</sup>。

1980年代半ばに勃発した「歴史家論争」について、W・モムゼンはユルゲン・ハーバーマースに加勢して、その対決者を徹底的に批判した。モムゼンは「ナチズムの歴史にいい加減終止符を打つべきか?」という問いに否定的に答えているが、その理由は何よりも、他の諸民族がそれを決して

許さないからというものであった。つまりモムゼンは、まずは現実政治を考え、ドイツ近現代史研究はそれに奉仕する営みだと見ているのである。このため歴史研究は、永遠に「修正主義的」(revisionistisch)、「批判的」(kritisch) 考察、つまり「西欧的デモクラシー」を価値基準にした「ドイツ特有の道論」的な近代ドイツの糾弾であり、それを踏まえてのヨーロッパ理念の唱道とドイツ国民国家の否定でしか、論理的にあり得ないことになる。白黒図式での過去の裁断を批判するニッパードイ、第三帝国の起源をドイツ国内の権威主義的支配にではなく、ソヴィエト連邦の擡頭に見ようとするノルテ、(ドイツを含む)「西欧文明」(westliche Zivilisation)の守護者だったプロイセン国家の解体が文化の敵ソヴィエト連邦の西漸を招いたと慨嘆するアンドレアス・ヒルグラーバー(1925-1989年)、連邦宰相コールの顧問として西ドイツ国家公認の歴史像を確立しようとするミヒャエル・シュトゥルマー(1938年-)、第一次世界戦争を単なる勢力均衡の崩壊として特にドイツに著しかった攻撃的帝国主義の役割を重視しないクラウス・ヒルデブラント(1941年-)やグレゴール・シェルゲン(1952年-)——こういった歴史家たちの唱道するものは、「いわゆる無前提な理解」、「いわゆる『客観的』な歴史的理由」を提唱して、「規範的・デモクラシー的基準」をできるだけ等閑にし、ドイツ・ナショナリズムを免罪・強化しようとする「新歴史主義的」(neohistoristisch) 傾向に他ならないと、モムゼンは考えたのである<sup>39)</sup>。

それでは「認識を導くパラダイム」(erkenntnisleitende Paradigmata)はどこから来るのだろうか——W・モムゼンの言うには、それは決して専門的歴史学(professionelle Geschichtswissenschaft)から来るものではない。「こうしたパラダイムは歴史家が作るのではなく、彼らはそれを今日的なものにするだけである。」<sup>40)</sup>

以上のように、1970・80年代に「ポスト・ナショナル」な言論活動を展開してきたW・モムゼンにとって、1989年11月9日の「ベルリンの壁」崩壊は、まさしく青天の霹靂であったことだろう。モムゼンの見立てが正しいなら、ビスマルク帝国を念頭に置いた国民国家理念は、ドイツ人にとってすでに魅力を失っているはずであり、またヨーロッパ理念を重視するなら、これと矛盾するというドイツ国民国家再興運動は否定しなければいけないはずであった。ところが1990年、旧プロイセン東部州を犠牲とし、エステルライヒを枠外としながらも、東西ドイツ「再統一」による小ドイ

ツ主義的な国民国家が復活し、しかもこれがその後の展開において、ヨーロッパ統合を脅かすことにはならなかった。ドイツ統一を不快とする戦勝国、とりわけフランスやイギリスも、米ソが了承する以上は表立って妨害することはできなかった。W・モムゼンは当然、ここで釈明あるいは自己批判をすべきところだが、統一ドイツ誕生後はかつてのような華々しいナショナリズム論議から撤退して、ヴェーバーやドイツ帝国に関する個別研究や概説叙述にしか手を触れなくなった。モムゼンの提唱していた「ポスト・ナショナル」な秩序とは、ドイツ「文化国民」とは一体どうなったのか、そうした問題にモムゼンは何ら決算をすることができなかったのである。これは、「ヨーロッパ的国民国家」の旗振役へと華麗な転身を遂げたヴィンクラーや、飽くまでナショナリズムへの懐疑を貫き通したヴェーラーとは異なる行動様式である。2004年に死去するまで、モムゼンのドイツ国民論は僅か3つの論文に、ごく間接的に現れたに過ぎなかった<sup>41)</sup>。

第1の論文が、1992年に『政治と現代史から』に掲載された論文「ドイツ民主共和国の歴史学——批判的考察」である。これは統一前からのW・モムゼンの厳しい東ドイツ評価を、その歴史学にまで広げたものである。モムゼンは東欧各国の社会主義体制を不正な「全体主義」国家と断定した上で、そういった体制が、とりわけポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリーにおいて、異論派の抗議行動により崩壊に到ったことを喜び、その際歴史家が果たした役割を称讃したが、東ドイツでは大半の歴史家が最後の最後まで体制を支持する側にいたとして、これを厳しく非難した。モムゼンは、エルンスト・エンゲルベルク(1909年-)、ヨアヒム・シュトライザント(1920-1980年)、ヴァルター・マルコフ(1909-1993年)、ヴェルナー・ベルトルト(?)のように、東ドイツ歴史学にも学問的資質において申し分ない歴史家がいたことは認めつつも、彼らが社会主義にファシズムへの唯一の対抗秩序を見出していたことを指摘し、この考え方を「根本的に間違っている」(grundfalsch)と切り捨て、60年代後半から東ドイツ歴史学がますます教条的になっていったと指摘した。またモムゼンは、東ドイツ歴史学が労働者階級に加担した党派的歴史叙述を、歴史的進歩に根差した「客観的」なものと称していたことについて、なるほど西ドイツでもランケ的な客観的歴史叙述論は批判されているが、だからといって歴史認識が党派的になって当然ということはなく、歴史家個人の好きなように歴史が描けるわけではないとした。モムゼンは東ドイツ歴史学の自浄能力のなさ

を批判し、東西ドイツの一体化のためにかつての歴史学者たちの差し当たっての退場を求めたのだった。モムゼンのこうした東ドイツ歴史学批判は、当時進行していた旧東ドイツ地域の諸大学における、東ドイツ系研究者の追放と西ドイツ系研究者の採用を肯定する議論になっていたと言えよう。ただモムゼンは政治的抑圧に晒されず研究することができた西ドイツ系研究者が、高慢に東ドイツ系研究者を断罪することを戒めてもいた<sup>42)</sup>。

第2の論文は、同じく1992年に刊行されたW・モムゼン編『長いヨーロッパへの道』である。これはヨーロッパ統合を政治的、経済的に進展させるマーストリヒト条約を受けて、また冷戦終焉による「鉄のカーテン」の消滅を受けて、ヨーロッパ共同体の内外の各国の論者がヨーロッパ統合について論じたものを集めた論文集である。ところがモムゼンは、ドイツの部分をヴィルフリート・ロート(1948年-)に委ね、自らは序文しか書いていない。そこでは東西ドイツ統一の意義は正面から論じられていないが、杜撰だった旧東独経済が連邦共和国の重荷となっていること、東欧が新たな危機の根源となりうるものが指摘されており、西欧主義的なヨーロッパ統合推進者モムゼンの、東方への不信感が滲み出た形となっている<sup>43)</sup>。

第3の論文は、『歴史と社会』に掲載されたトーマス・ニッパードの追悼文である。ニッパードは哲学で博士号を取得したあと、シーダーの助手として歴史学を学び、ゲッティンゲンで教授資格を取得したのちは、モムゼンら「修正主義的」歴史学の批判者であり続けた人物であるから、モムゼンのニッパード評は緊張したものとなった。故人の追悼文という性格上、この文章は讃辞で溢れているものの、そこには統一前からのモムゼンの方針が変わらず貫かれている。つまり、一方でモムゼンはシーダーの政党研究に示唆を受け、権威主義的なドイツ帝国における政党組織の未発達を論じたニッパードの教授資格論文を絶讃し、ニッパードが獲得した最初の講座(カールスルーエ工科大学)が、長年シュナーベルが占めた「伝統豊かな」ものであったことを紹介し、ニッパードが旧世代の思想史中心主義から脱却しようとしたことを評価した。他方でモムゼンは、ニッパードが1970年代以降、拡大する歴史主義やドイツの「過去」への批判に対して、歴史主義を決然と擁護し、また過去の世代への「公正さ」を要求し、価値判断から自由な歴史叙述を提唱したことを冷めた調子で詳述し、それがベルリン自由大学時代の学生紛争などで得た不愉快な思い出

に影響された可能性を示唆した。またニッパードアの遺作『ドイツ史』が、異なる生活領域を同じ比重で叙述したため、全体を導く理念が欠如していることを指摘したのだ<sup>44)</sup>。

## 注

- 1) 大石俊一『英語帝国主義論——英語支配をどうするのか』(近代文芸社、平成9年)。
- 2) Hans-Ulrich Wehler (Hrsg.), Deutsche Historiker, 9 Bde., Göttingen 1971–1982.
- 3) Volker Reinhardt (Hrsg.), Deutsche Familien. Historische Portrait von Bismarck bis Weizsäcker, München 2005, S. 147–152.
- 4) Wilhelm Mommsen, Richelieu, Elsaß- und Lothringen. Ein Beitrag zur elsäß-lothringischen Frage, Berlin 1922.
- 5) Reinhardt (Hrsg.), Deutsche Familien, S. 162–167.
- 6) Rüdiger Hohls/Konrad Jarausch (Hrsg.), Versäumte Fragen. Deutsche Historiker im Schatten des Nationalsozialismus, Stuttgart/München 2000, S. 191.
- 7) Hohls/Jarausch (Hrsg.), Versäumte Fragen, S. 163–167.
- 8) Wilhelm Mommsen, Die politischen Anschauungen Goethes, Stuttgart 1948.
- 9) Wilhelm Mommsen, Geschichte des Abendlandes von der französischen Revolution bis zur Gegenwart, 1789–1945, München 1951.
- 10) Wilhelm Mommsen, Deutsche Parteiprogramme. Eine Auswahl vom Vormärz bis zur Gegenwart, München 1952.
- 11) Hohls/Jarausch (Hrsg.), Versäumte Fragen, S. 191 f.
- 12) Versäumte Fragen, S. 191–195; Wer ist wer? Das deutsche Who's Who, Lübeck 1997, S. 986.
- 13) Versäumte Fragen, S. 195–203.
- 14) Versäumte Fragen, S. 213 f.
- 15) [http://www.uni-duesseldorf.de/home/Ueber\\_uns](http://www.uni-duesseldorf.de/home/Ueber_uns) (2009年10月26日閲覧)。
- 16) Wer ist wer? Das deutsche Who's Who, Lübeck 1997, S. 986. 不思議なことに、この年度よりあとにはW・モムゼンの記載がなくなっている。
- 17) Wer ist wer? Das deutsche Who's Who, Lübeck 1997, S. 986.
- 18) Niall Ferguson, Der falsche Krieg. Der Erste Weltkrieg und das 20. Jahrhundert, München 2001.
- 19) Wolfgang J. Mommsen, Max Weber und die deutsche Politik 1890–1920, 3., verbesserte Aufl., Tübingen 2004.
- 20) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 95, 100.

- 21) 今野元『マックス・ヴェーバー——ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』(東京大学出版会、平成19年)、234-237頁。
- 22) 今野元『マックス・ヴェーバーとポーランド問題——ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズム研究序説』(東京大学出版会、平成15年)、166-169頁。  
Mommsen, Max Weber und die deutsche Politik, S. 63.
- 23) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 7-14, 186.
- 24) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 9-15, 76, 137.
- 25) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 20-22, 64.
- 26) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 23-26.
- 27) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 78-85.
- 28) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 108-112.
- 29) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 87-105, 109.
- 30) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 31, 34 f., 103 f., 112.
- 31) ヘルマン・ハインベル(1901-1988年)の誤記か。
- 32) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 16-20, 31-33, 57-59, 151, 171, 173, 186.
- 33) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 33-42.
- 34) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 42-45, 59, 66-68.
- 35) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 27-30, 52 f.
- 36) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 29, 115 f., 157.
- 37) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 37, 55 f., 78-85, 188.
- 38) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 73-75.
- 39) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 119-141, 147.
- 40) Mommsen, Nation und Geschichte, S. 147.
- 41) 1990年から2004年までのW・モムゼンの執筆状況については、Bibliographie zur Zeitgeschichteの該当巻を参考にした。ただこの文献一覧が網羅的でない場合もあるので、後日訂正が必要になるかもしれない。
- 42) Wolfgang J. Mommsen, Die Geschichtswissenschaft in der DDR. Kritische Reflexionen, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B 17-18/92, 17. April 1992, S. 35-43.
- 43) Wolfgang J. Mommsen (Hrsg.), Der lange Weg nach Europa. Historische Betrachtungen aus gegenwärtiger Sicht, Berlin 1992, S. VII-XXI, bes. VIII-IX.
- 44) Wolfgang J. Mommsen, Die vielen Gesichter der Clio, in: Geschichte und Gesellschaft 19 (1993), S. 408-423.